

# 道 どうひょう 標

*d o h y o*

年間特集 「おしえ」

第一回・民藝に導かれて

太田 浩史さん

連載

あなたのいのちの物語

荒地の雑草を讃える

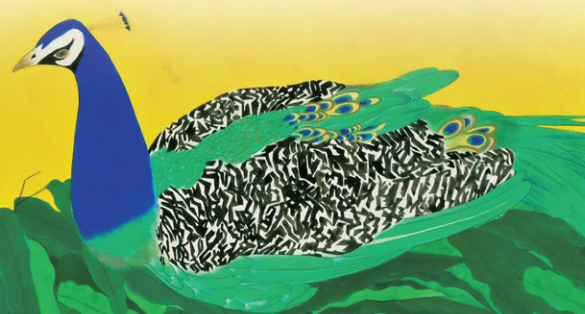
伝承を科学する

能楽の謡は息で謡う

道しるべ

自力を捨てて 他力に帰す

2024 冬季号





年間特集

「おしえ」

民藝に  
導かれて

第一回

太田 浩史さん



子どもの頃、寺はにぎやかなところだった。私の自坊でもいろんな業者が本堂を借りて幻燈や映画を上映し、熱帯夜の晩でも満員となった。中でも楽しかったのは年に一度やってくる骨董市こっとうだった。本堂に所狭しと雑多な物が並ぶ。今から思うとあやしげな物もたくさんあって、だまされた村人も相当いたと思う。月参りや法事に行くとその時に買ったらしい物を飾っている家があって苦笑することがある。

中学一年生の頃だったと思う。骨董屋の店主が「今回もよく売れた」と福々顔して、「いつも世話になっているから、坊ちゃんにお返しをしよう」と言って売れ残りの品々を指差した。「一つだけ坊ちゃんの気に入ったものをあげるから、どれでも選ばっしやい」。その中には古そうな鍔よぶい兜や、芝居で使う槍や刀もあったが、ふと私の目にとまったのは、小さな陶製の物体だった。それが何に使うものかわからなかったが、鼠色の地に白い菊型の模様が丸みをおびた円筒形の全体にほどこしてある。店主は「何とも欲のない坊ちゃんだ。そんなものはあげるから、あのヨロイなんかを選びなさいよ」とあきれてすすめたが、「一つだけという約束だからこれでいい」と断って、その小さな物を手に取った。

私はもちろんわからなかったが、店主もやはりわからないらしい。「何焼ですかね、それ」と首をかしげた。物知り顔の父に訊くのはしゃくだから、私は隣の光徳寺（富山県南砺市福光町）の住職高坂貫昭師のところへ持って行った。光徳寺には不思議な品々が命をもった動物のように



いっぱい並んでいた。民藝運動の主人公である柳宗悦先生の高弟である貫昭師は、私の差し出した小さな陶器を一見して「これは君が自分で選んだのか？」とたずねた。私がそうだとすると、白く長い眉毛の下にあるおだやかな眼をきらめかせながら、「よくやった」と微笑んだ。そしてその物体を愛撫しながら「これは朝鮮李朝の三島手みしまでの水すい滴てきだ。おそらく本堂にあった物の中から最も好きな品を君はえらんだはずだ」と説明した。これが私と民藝みんげいの教えとの出会いである。「三島手」というのは李朝初期の焼物の一種で、その水滴（硯に水を注ぐ器）はノミで彫ったあと白い土をすり込んであるのだ。彫三島と呼ばれるものだった。

いったん道がつくと、いろんな物が見えるようになった。驚いたことに、父が普段使っている食器が随分好い物であることもわかってきた。たまりかねた父が風呂敷包みを一

自他とか美醜とかいう二元対立に意識が分れる

以前のところに真の美が直観される

つ手渡し、「これを吉田龍象さん  
のところへ届けてくれ」と言った。  
この人は寺を持たぬ仏法者で、「白



吉田龍象師

道舎」という聞  
法道場を主催し  
て多くの人々を  
導いていた。あ  
とでわかったこ  
とだが、龍象師

は鈴木大拙を師とし、曾我量深を兄  
とし、安田理深を友としている、文  
字通り徳の高い僧のたとえとする  
「龍象」だった。

玄関で風呂敷包みを渡してすぐさま  
帰ろうとすると「ちよっと待て」と  
来た。「お前、ワシのところへ来た  
からには、何か聞きたいことがあ  
るのだろう」と言うのである。「ま  
あ上がれ」と座敷に通されて、「さ  
あ、何が聞きたい」「何もありません  
と」押問答をしばらく繰り返した  
あと、思わず私の口から出たのは「何  
にしても面白くないときは、どうし  
たらいいんですか」という本音だっ  
た。言ったらたんにこれが自分の本  
音だとわかった。どんな答えが返っ  
てくるだろうかと待ち構えたが、思  
いがけず帰ってきたのは質問だっ

## 法に依って 人に依らざれ

た。「じゃあ訊くが、もし面白いこ  
とが見つかつたら、その時お前はど  
うしてくれるんじゃない?」。これには  
参つた。そんなことはまったく考え  
の中になかつた。完全に意表をつか  
れたと思つたとき、ふいに「二」の  
こだわりが消え、あの李朝の水滴を  
見つけた時の「不二」がもどってきた。  
私は高校生になり、日曜日には富  
山の民藝館に通うようになった。売  
店で見つけた南方染付の皿を手に  
取っていると、後ろで「いいもの選  
んだね」という声があった。ふりむく  
と濱田庄司先生だった。民藝の書物  
で何度も見掛けている春風駘蕩とし  
た田舎親爺風の顔がそこにあつた。

濱田先生はものす  
ごい勢いで買物を  
はじめた。物を選  
ぶのにおそらく  
〇・一秒もかかっ  
ていない。私はそ  
の後姿に声をかけ  
た。「あのう、濱  
田庄司先生でしょ



うか、血色のよい顔がふ  
り向いた。「いかにも濱田  
ですが」「私は先生を尊敬  
している者です。先生をお手本とし  
て生きていきたいと思つておりま  
す」とたどたどしく言うと、先生  
は私の顔を見て、「ダメ、ダメ。そ  
んなんじゃない」と掌をひらひらさせ  
て、「こんな濱田なんかをお手本に  
しちゃいけませんよ」と言うので  
ある。「なぜならば、この民藝館に  
はこの濱田がお手本にしているもの  
がいっぱいあるからね。だからあな  
たも私なんかをお手本にせず、私が  
お手本とするものをお手本にしな  
さい」。その言葉を私の胸に残して、  
憧れの濱田先生は握手を  
交わし、翻然として立ち  
去つた。今にして思えば、  
濱田先生は「法に依つて  
人に依らず」という柳先  
生の教えを単的に述べら  
れたのだろう。  
どうにかこうにか荒れ  
すさんだ気分が収まった



左 高坂貫昭師 右 棟方志功氏

頃、父は「会わせたい人  
がいる」と私を金沢に  
誘つた。香林坊のデパー  
トでは棟方志功先生が個  
展を開いていた。「これ  
が息子です」と父が紹介  
すると、棟方先生は極めて度の強い  
メガネ越しに私を見て、「ああ、そ  
うなの。アナタが太田シヤンの息子  
シヤンなの」と言つて、いきなり私  
の両手をガバツとにぎりしめ、「シヨ  
リ(それ)はよがつたね!」と叫ん  
だ。何がよかつたのだろうか? 全体で  
ある。先生は初対面である私の全体  
をそのまま無条件で受け取ってくれ  
た。民藝の世界には人と物の区別は  
ない。これまでいろんな先生方が示  
してくださつた数々の教えを、私を  
取り囲む民藝品達が同じように生活  
の中で示してくれている。

### 太田浩史(おおた ひろし)

富山県南砺市真宗大谷派大福寺住  
職・となみ民藝協会会長。  
1955年富山県城端町(現・南砺  
市)生まれ。大谷大学卒業。大福寺  
に民藝品公開施設「不二門」を創建。  
「土徳」をモットーに、民藝の精神  
を活かした地域振興を提唱。



## 荒地の雑草を讃える

高見順

「草のいのちを」

一九四六年二月発表の短編。近所に住む新聞社に勤めていた友人の内瀬が上海から帰ってきたという話を聞き、「私」がその家を訪れると、冒頭に「門の木戸が開け放しに成っている」。「門のなかは延び放題の雑草が、左様、私の蓬髪のごとくに乱れ枯れている」。

「私」は上海で内瀬夫妻に世話になったことがある。ところが内瀬は不在だ。ところが内瀬の妻が歓迎してくれる。「やんちゃな」細君に「小心翼翼たる」私は魅力を感じている。だが、雑草が入り乱れているようだ。

台所から突飛な歌声が聞こえてくる。「十二月だというのに半ズボンを穿いた突飛な細君の妹が歌っている」。細君は進駐軍相手の土産物屋をはじめ、手伝いの青年が訪ねてくる。内瀬の弟の清治が帰り、「荒々しく戸を閉める音」が

する。女たちは「爆撃がはじまると大変」、「おお恐い恐い」と荒れる清治に困惑している。

妹の貞子は女優志望だ。以前はこういう女性によく出会ったが、「戦争中は絶えて無かった。それがまた復活した。嵐が過ぎて若草が萌えはじめようとしている」。「戦争が終わった」と深い感慨を抱く。女優志望の挫折をいくつも見てきたが、今は「伸びようとする芽は、兎に角伸ばした方がいいのではないか」と思う。「嵐の後の若草の明るく逞しい成長力が心に来た」。

二三日後、内瀬宅を再訪する。上海の邦人は何とか中国人にものを売って暮らしているといった話だ。一方、一階は歌声でにぎやかだ。ところがそれが怒声にかわる。「家の中がまるで、めっちゃめちゃだ」。熱がある内瀬だが、階段を降りて乱暴をしている弟の胸ぐらを掴んで引きずりあげるようにして連れてくる。

「人生を大切にしろ」という内瀬に、清治は「僕には人生なんか無いんだ」といい、「そのうちに死にます」という。「私」も何か言わ

なくてはならない。「ただもう死ね死ねと教えた特攻隊」の残虐さも思い起こされ、「その為の彼のひねくれが哀れ深く思われもしたが」、絶望的混迷に溺れている愚かしさも腹立たしい。

「この家の門の中の雑草の乱れが、ふと心に来た。それがそのままこの家の象徴のようにも思えた。そして「来年の春まで、——若草の萌える時まで、待つんだな」と言い、突然、自作の詩のようなものを歌い出す。

「われは草なり／緑なり／全身すべて／緑なり／毎年かわらず／緑なり（中略）ああ生きる日の／美しき／ああ生きる日の楽しさよ

／われは草なり／生きんとす／草のいのちを／生きんとす」

「詩など書いたことのない僕が、半泣きになって書いた詩だ。清治君、よく聞いてくれ給え。もう一度歌おう」。「私の声は震えた。そうして眼に涙が溢れて来た」。「みんな、なんだか、なんともいえず可哀そうであった」。細君がきて、「まあ、どうしたの。可笑しな人たち」。そうだ「みんな、可笑しいのさ」。物語はこう結ばれる。

実はこの詩は戦時中のメモのようなものだった。それが蘇り、作家の詩心を目覚めさせた。戦争の陰惨な暴力と死臭に打ちひしがれつつ、荒地になお育つ雑草の「いのち」に向かい、それを讃え心に宿す、そうした祈りのような小さな物語だ。

## 島園進（しまぞのすすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院グリーンケア研究所客員所長。著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちをつくつてもいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。



# 伝承を科学

学

する

## 能楽の謡は「息で歌う」

能楽の謡は、日本のわらべ歌や民謡などと同じように、五音音階（レミソラシ）の旋律をもつ歌である。しかし、それはあくまでも理論上のことである。実際の声の響きは、わらべ歌や民謡とは程遠く、厳粛な感じをうける。

謡は、カラオケで歌う歌謡曲のように、気持ち良く声帯を鳴らして歌う歌ではない。剣道の掛け声のように、激しく息を出し、気合いを込めた大声を出すのだが、そのような発声が生まれた土壌は江戸時代にさかのぼる。江戸時代以来、謡は、武家の生真面目な儀式音楽であった。笑いや微笑みとは程遠い、気合いのこもる声の響きが、主な担い手である武家の男性たちの間で培われていったのだ。

こうした声の響きの形成は、子供のときからの厳しい鍛錬の結果でもある。能の舞台にはしばしば、声変わり前の子供が、劇の役として登場し、謡を歌う場面がある。子供には、旋律を美しく歌うことは期待されていない。まずは、言葉

を間違えないこと、そして大声を張り上げることが期待されるのである。そして子供たちは、成長していく中で「息で歌う」という教えを体得していく。

謡では、ひとつの音を引き伸ばすとき、カラオケの歌のように、息の量を一定にして同じ音の高さを維持させているのではない。むしろ、言葉の発音の後で伸ばす母音にも力を込めて、音の高さを微妙にすりあげる。そのとき、息はふつうに歌を歌う以上に多く吐かれていなくてはならないときには、音よりも先に、息がなくなってしまうだろう。それでも、息を出し切る気分が続いていなくてはならない。

昭和初期の伝説的な名人に、野口兼資という能楽師がいる。今もユーチューブでその録音を聴くことができているが、押し潰したような難声である。声を引き伸ばすときも、音は途切れ途切れ

になって震えて、しばしば音がかすれる。高さも揺らぎ、旋律は安定しないが、吐く息が作り出す力強さと、その残像が見事に表現される。

明治時代以前の能楽師の冬の朝の寒稽古には、次のようなやり方があったらしい。

ふつうの声でなしに、とにかく声を出さずに出す。すんすんすね。それは苦しいんです、はつきりいうと、声を出さずに、息で謡うわけですね。「し・か・い・な・み・し・ず・か・に・て」



江戸時代の子供の謡の稽古  
『萬葉小謡千秋楽』天明7年刊行

と息で謡う。調子のいい時はいいですけど、どうかすると息が詰まったり、咳が出たりしてしまふ。

（大西信久氏『京観世をたずねて』CBS/sony、一九八〇年）

声帯を響かせずに息を出すというのは、尺八や横笛の歌口に、音がわざと鳴らないように強く息を吹き込んで演奏するのに等しい。喉を痛めること必至である。しかし、喉を痛める鍛錬こそがやがて、息の量の操作を可能にし、作品の中の人物の情動を深く彩るといって、洗練された表現技法へと発展していくのである。

能楽の謡は、おいぼれて枯れているように聞こえても、じつは力強い。その力強さは、「息で歌う」鍛錬によつて生み出されているのである。

藤田隆則（ふじた・たかのり）

一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。



天岸淨圓 (あまぎしじょうえん)

1949年(昭和24年)生まれ。本願寺派布教使。
行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。

◆自力を捨てて 他力に帰す

親鸞聖人、七十九歳の法語に、

浄土宗のなかに真あり、仮あり。

真といふは選択本願なり、仮といふは

定散二善なり。選択本願は浄土

真宗なり、定散 善は方便仮門なり。

浄土真宗は大乗のなかの至極なり。

『浄土真宗聖典注釈版』七三七頁

と、言われています。

法然聖人の教えによつて念仏申す人のなか

に、真・仮がある。「真」とは「まこと」正し

い念仏、「仮」は「かり」未熟な念仏。ただし、

念仏そのものに正しい、未熟の別はありません。

念仏申す人が阿弥陀仏のおまごころにかな

ているか、逸れているかをあらわすためのお言

葉です。

「真」を「選択本願」といわれています。こ

れは法然聖人のお言葉です。聖人は「選択と

は取捨」の意味と言われました。阿弥陀仏

は万人を平等に救うために取捨をされたので

す。それは人によつて出来不出来が生ずる「自

力修行の仏道」を選び捨て、出来不出来

の生じない「他力信心の仏道」を選び取られ

たのです。「他力」とは「要らぬ氣遣いはせずに

すべて私にまかせなさい」と、言われているの

です。この道が選り取られたなら、おまかせ

しないことは救いを断わることになるのです。

「仮」の内容とされた「定散二善」は「さま

ざまな善根」を意味する言葉で、自分の持

つているものを役立たせようとする心根です。

それを「自力心」といい、阿弥陀仏は「要らぬ

氣遣い」と言われるのです。「氣遣い」は殊

勝なまごころに見えますが、相手の心を無にして

いることでもありません。ですから「氣遣いの念

仏」は、阿弥陀仏のおまごころを聞き損なつた、

未熟な念仏と言われたのです。このような「氣

遣いの念仏」では、いつまで経つたも安心は恵

まれません。

それに比べて浄土真宗の私たちは念仏に

「お」をつけて「お念仏」。信心に「こ」をつ

けて「信心」と言っています。これは、念仏、

信心が助けていただく条件でなく、「信心」

「お念仏」自体が、阿弥陀仏の「他力」が、

すでに私にとどいて下さっている事柄といた

くからです。

阿弥陀仏のご真意を選択本願といい、

「自力を捨てて、他力に帰す」ことを浄

土真宗とあらわされ、大乗仏教の至極と

編集後記

以前、鈴木大拙師の「妙好人」を

読んで浅原才一を生んだ鳥根の温泉津

に実際に足を運んでみた。何故かその

時、初めて柳宗悦氏の存在、そして

「民藝」という言葉に触れたのであ

つた。後になってこれは決して偶然のこ

とではないことが解った。それは一本

の線が繋がっている。大拙師は禅の思

想を海外に広く知らしめたことは有名

である。が、同時に氏は浄土思想特に

真宗に関しても多くの著作を残してい

る。その中で「有・無をはじめ物事を

二つに分ける考え方そのもの」に対

して問題を提起し、そうした概念の生

まれる前の大本をみることの大切さを説

いておられる。そしてまさしくそれは

大乗仏教の神髄、「不二」の教えである。

師はその精神を真宗の一般の信者「妙

好人」に見いだされた。そして柳宗悦

氏は「民藝品」の中に見いだされたの

である。

今「対立」と「分断」というその真

逆の言葉で世界は覆われている。相手

を罵倒する、やつけることこそ正義と

され正当化される世の中、それは今あ

る混乱の助長であり解決策とは決して

ならない。長い年月を経て日本の風土

に培われた教え。その教えに今一度日

本人、世界の人々は立ち還る必要があ

るのではないかと思う。 合掌

表紙の絵 無憂樹に孔雀 (東本願寺襷絵)

無憂樹をインドではアシヨカという。シヨカ

は憂いので、アをつけるかと否定形となり

無憂となる。どの季節もインドに調査に通

つているが、無憂樹の花は見たことがない。釈

尊の母マーヤ夫人が右手で無憂樹の枝をつか

んで出産したと伝えられている。仏教はイン

ドでは五世紀後半から密教化する(ヒンドゥ

教化)。ヒンドゥの神々はそれぞれに乗り物の

動物を配する。大日如来を中心に東に「阿

闍」、南に「宝生」、西に「阿弥陀」、北に「不

空成就如来」の仏国土があるとされた。阿

弥陀如来の乗り物は孔雀とされている。無

憂樹の頂に阿弥陀如来の象徴として孔雀を

描いた。

畠中光享(はたなか こうきょう)

日本画家/インド美術研究家
/真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

0120-81-7065 06-6771-7007

ホームページ: http://www.hirose.jp/06777007/06777007
〒640-0082 大阪府天王寺区東横丁1-12
(西本願寺南隣 徒歩5分)